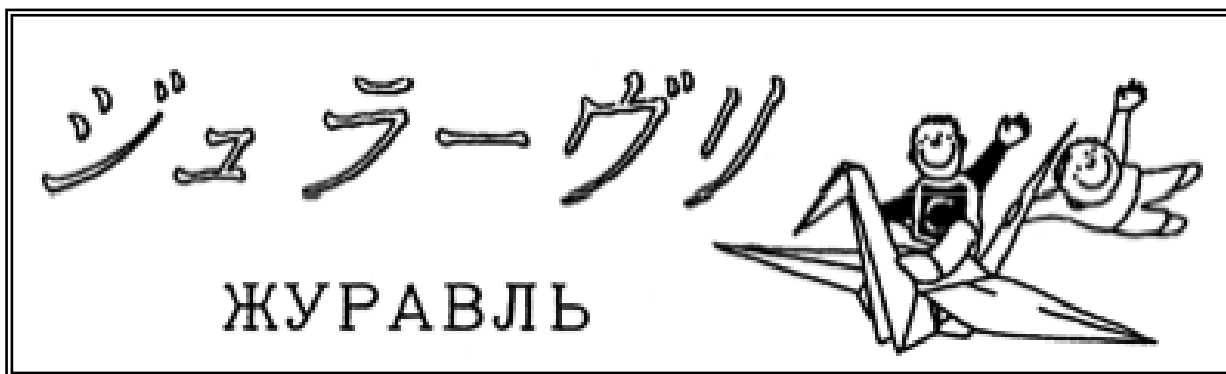




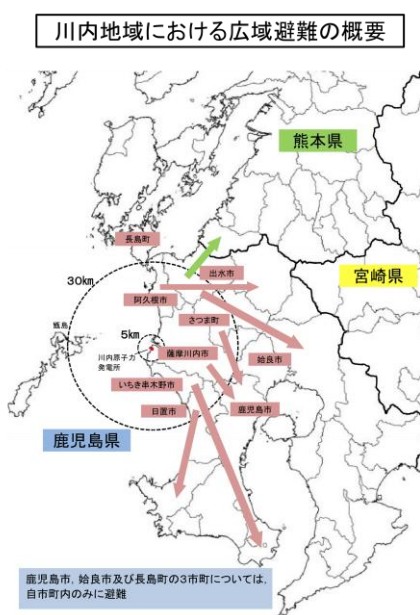
チェルノブイリ、フクシマを繰り返さないで！ 重大事故を前提にした原発再稼働を許さない！ 川内原発の再稼働を止めよう！

原子力規制委員会は、2014年9月10日、九州電力の川内原発1・2号機の再稼働に係わる「設置変更許可」を決定しました。これにより、川内原発は、東電福島第一原発事故後「安全性が強化された新基準をクリアする初めてのケース」とされ、再稼働に向けた地元自治体の同意などの「手続き」が本格的に進められています。経産省は9月12日に早速、福島県と薩摩川内市を訪れ「いかなる事情よりも安全性を優先させ、国民の懸念の解消に取り組みながら、原子力規制委員会が安全性を確認した原発の再稼働を進める」という文書を手渡しました。一方、規制委員会委員長は「新規制基準を満たしたから安全とはいえない」「再稼働の是非は判断しない」と発言しています。原発の「安全性」に対して責任を持つとは、誰も言えない中で、政府や電力会社は、フクシマのような重大事故をも前提に再稼働を強行しようとしているのです。

「ストップ再稼働！3.11鹿児島県集会実行委員会」等、地元で再稼働反対に取り組んできた人々は、巨大地震に耐えられない、巨大噴火の予知はできず対応できない、地下水流入や水蒸気爆発、そしてテロ攻撃等の危険性、等々、課題は山積みだと指摘し、大量被ばくが避けられない「避難計画」しかない中での再稼働は認められないと反対運動を強めています。（「9.28全国集会」の報告は別記）

九州電力は、「地元同意」は原発立地の薩摩川内市と鹿児島県のみで十分としています、周辺の市町村、

政府の第3回「原子力防災会議」(2013.12)資料より。



住民からも不安と反対の声が上がっています。始良市議会（一部が30km圏内）では「再稼働反対」「川内原発1、2号機廃炉」を求める意見書が採択されました。また、いちき串木市（30km圏内）、日置市（一部が30km圏内）の議会でも、再稼働前に必要な地元同意の範囲に、それぞれの市を含めるよう求める意見書を可決しました。

県と関係市町、関係省庁が参加したワーキングチームが作成した、川内地域の「緊急時対応」計画では、「原子力災害」時に緊急避難の対象となる「予防的防護措置を準備する区域」(APZ)は5km圏内のみであり、5～30km圏内の「緊急時防護措置を準備する区域」(UPZ)でも、毎時 $20\mu\text{Sv}$ を超えるまで一時避難の指示も出されないことになっています。そして30km圏外は、避難者の受け入れ先としての対策しか考えられていません。これでは重大事故の緊急時に、周辺住民に被ばくを押しつけることを前提とした「対策」といわざるをえません。情報の伝達、自家用車を使った避難、入院患者や社会福祉施設入所者の移送と受け入れ先の調整、等々の計画も、大地震に伴う重大事故が起こったフクシマの実態を見れば、非現実的な「絵に描いた餅」としか言いようがありません。政府、九電、鹿児島県は、重大事故によって放射能汚染が30km圏外どころか200キロ以上も広がったフクシマ事故の現実から何も学んでいないのです。

フクシマでは、飯舘村など30km圏外も含めて高放射能汚染のために避難を余儀なくされました。さらに広範な地域の多くの人々が長期にわたる被ばくと汚染の中での生活を強いられ、将来の健康被害への不安を抱きながら過ごしています。健康と命、生活が脅かされ、様々な形で人権が侵害されています。農業、漁業などの一次産業をはじめ、地域の産業・経済全体が放射能汚染によって大きな打撃を受けています。地域の社会や家族までもが分断され、事故前のふつうの生活ができなくなっています。また地域文化や伝統の継承もままならなくなっています。このような被害を、これ以上、繰り返させてはなりません。最善の「原子力防災対策」は、原発をなくすことです。川内原発の再稼働を許してはなりません。全国の原発の再稼働を止めさせ、原発を廃炉にしましょう。



9月28日、7500人が集まった
「川内原発再稼働反対！全国集会」鹿児島市

ストップ川内原発再稼働！9.28 全国集会に参加

3.11 は何だったのか？

たった三年でなにもかもすっかり忘れたのでしょうか？

原子力規制委員会は川内原発 1、2 号機の審査を終え、九州電力はいまにも再稼働しようとしています。

気が気ではなく、9 月 28 日、鹿児島現地の全国集会に参加しました。

鹿児島県内と九州各県を中心に、7500 人が集まり、川内原発再稼働ストップ！と、いき高く声を上げました。

直前の御嶽山の噴火もあり、九州の火山の危険性についての発言がありました。実際過去何度も火砕流に襲われた土地です。また直近の活断層の危険性、避難経路の不備や福島の実況の報告が次々続きました。

そもそも、規制委員会の川内原発評価からして大間違い。基準地震動の過小評価は明らか。と、ビラを巻き、参加のみなさんに声をかけ、市内ヘデモを行いました。再稼働は、鹿児島だけ、九州だけの問題ではない、全国の課題だと盛り上がりました。



かわいい「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の旗を持って立っていると、新聞 2 社に取材を受けました。何を一番考えて今回参加したか？と聞かれたので、「繰り返さないで！チェルノブイリ」と訴えていたのに、日本でのフクシマ事故を悔やむ。福島でもチェルノブイリでも被災者は今も苦しんでいる。

原発事故は人災。天災ではない。いざという時の避難？もう一度あの事故をやる気ですか？と問い掛けたい。と言いました。

最近のマスコミの政府寄り、弱気も注意しときました。

帰りに観覧車に乗って、桜島を見ました。美しく大迫力でした。同時に火山の国、地震の巣に住んでいることを、自然の中に生かされていることを、思いました。



長沢由美

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2014.6. 2～2014.10・17)

田中道子 池田晴海 東野セツ 久保きよ子 吉川純香 斉藤玖仁子 谷岡文香 磯山霊秀 鎮西節子 田原良治 金山次代 井上保子 中川慶子 尾崎一彦 斎藤直樹 堀口眞也 碧海宏 熊沢滋子 岩崎幸二 小谷正廣 佐野米子 稲田多恵子 高木祥伍 染木富美代 久保美恵子 即得寺 藤田達 住吉純子 稲田みどり 佐藤ちい子 長沢由美 松本郁夫 長谷川育子 山下晴美 嶋田千恵子 奥谷恵子 藤尾周作 富田洋香 岸上知三 池本ゆり子 原発の危険性を考える宝塚の会 木村英子 田中章子 振津かつみ 猪又雅子 (順不同・敬称略)

引き続きご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします！



チェルノブイリ原発事故 28 年の被災地訪問報告-その 2

事務局／振津かつみ

前号の「訪問報告-その 1」では誌面の関係で、クラスノポリエの汚染の概要と同地区のソーヌチカ幼稚園訪問、病院での衛生局長さんの話だけを掲載しました。今回は、訪問前の事情、クラスノポリエの残りの訪問先とチェリコフ訪問のことを報告します。なお、全体の訪問日程、訪問先の地図などはホームページから前号をご参照下さい。(下記)

<http://wakasa-net.sakura.ne.jp/che/96.pdf>

ミンスクのマリノフカ「移住者の会」、ロシアの汚染地ノボツィプコフ訪問は次号に掲載します。

久しぶりのモスクワ経由の旅

昨年(2013 年) 11 月に、ベーラさんの夫のニコライさんが病気で入院したために、12 月に予定していた訪問を延期しましたが、ニコライさんの病状も回復に向かっているとのことで、「事故 28 周年」直前の 4 月に訪問することとなりました。

今回は、ロシアの汚染地域ノボツィプコフの視察もあるので、7 年ぶりに、モスクワ経由でベラルーシ入りすることにしました。久しぶりのモスクワ・シェレメチェボ国際空港は、建物も新しくなり、欧米の空港と同じような明るい雰囲気になっていました。(余談ですが…ソ連時代からこの空港を利用している人はご存知かと思いますが、暗い廊下やホール、外に出るとガソリンの臭いが鼻について「モスクワに着いた」ことを実感する…あの昔のシェレメチェボ空港が、なぜか懐かしく思い出されます。) 預けた荷物を取って出口を抜けると、モスクワ在住の通訳の松川直子さんが迎えてくれました。空港からベラルーシ駅(モスクワからベラルーシに向かう駅の名前は「ベラルーシ駅」)までは、赤い直通特急で約 30 分。これも便利になったものだ…とつくづく思います。

「救援関西」のメンバーの皆さんが託してくれたお土産のいっぱい詰まった特大のスーツケースを、低いホームから車内へと、なんとか松川さんに引き上げてもらって、モギレフ行きの夜行列車に乗り込みました。ロシアとベラルーシの国境は、列車で移動する際には「国境なし」とのことで、夜中にパスポートチェックで起こされることもなく熟睡し、無事、早朝にモギレフ駅に到着。

ベーラさんの夫ニコライさんの病状

モギレフ駅には、クラスノポリエからベーラさんが運転手さんと一緒に迎えにきてくれました。モギレフからクラスノポリエまでは、車で約 1 時間。車中で、夫ニコライさんの病状を尋ねました。私達は「脳梗塞」と思い込んでいたのですが、実は「心筋梗塞」だったそうです。たまたまニコライさんが病院にいる時に心筋梗塞を起こして倒れ、すぐに蘇生を施され助かったそうですが、一時は意識もなく命も危ぶまれたのだそうです。なんとか一命を取り留め、数週間後には退院許可ができるまでに回復したものの、また梗塞を起こしてしまい病状が悪化。その後、少しずつ落ち着

いて、今は自宅療養できるまでになっているとのこと。ニコライさんご本人はもちろんのこと、ベーラさんやご家族の皆さんは、ほんとうに大変だったと思います。

久々のクラスノポーリエのホテル泊

いつも訪問時には、私たちはベーラさんのお宅にホームステイをさせて頂いていました。昼間、ベーラさんが私たちの付き添いで忙しくしている間、夫のニコライさんが食事の準備などを手伝ってくれていたのですが、今回は、ベーラさんにもニコライさんにも負担をかけられないので、私たちは「ホテル」に宿泊することになりました。クラスノポーリエのホテルに泊まるのは、1993年に初めて10人の訪問団でクラスノポーリエを訪問した時に泊まって以来のこと。「ホテル」というより、旧ソ連の学生寮のような感じ(…と、言ってもわからないかな?)の宿泊施設です。建物は壁を塗り替えられてはいるものの20年前のままで(たぶん築40年は経っている?)、階段、廊下、薄暗い受付は、当時とほぼ同じ感じですが。20年前に泊まった時は、部屋のシャワーは水だけ、トイレが詰まって流れない部屋もあったりして…でも、歓迎して下さった地域の人々の暖かさに触れて、訪問団のメンバーは誰もそんな不便は気にならなかった…懐かしい思い出が蘇ってきました。今回、私達が泊まった部屋は、壁紙も新しく明るくて、素敵なカーテンが掛けられ、洗面所も改装をしたようで、ちゃんとお湯も出ましたし、トイレも詰まらず勢い良く水が流れ、快適に過ごせました。(たぶん、私たちが泊まったのは、一番上等な部屋だったのでは…と思います。ツイン・ベット、応接室、シャワーとトイレ付き、食事なしで、二人で一泊約4500円でした。ベラルーシでは、幼稚園の先生の月給が25000円くらいとのことでしたので、地元の人にとっては結構な額です。)

私たちの他に、ホテルには、他の地域からきた建設労働者たちが多数宿泊していました。ちょうどクラスノポーリエでは、新しい集合住宅を数棟と、大きな鉄筋の屋内プールの建設中でした。地方の農村地帯の汚染地域ということもあり、事故後、新しい企業による投資などはほとんどなくなってしまったこの地域では、若い働き盛りの男性の多くが隣国ロシアのモスクワなどの大都市に出稼ぎに行っています。「せっかく新しい建設事業があるなら、地域の人々を雇用すればいいのに…」と思い、ベーラさんに尋ねてみたところ、「クラスノポーリエでは、鉄筋の溶接などのできる熟練の労働者がいないので、他の地域から建設労働者が来ているのよ。」とのこと。なんとも、やりきれない気持ちになりました。



ホテルの入り口

「障がい者リハビリセンター」訪問

「障がい者リハビリセンター」は、ベラルーシ政府の指示で4年前に設立されました。街の文化

センターの建物の一角を使って運営されています。私たちはベーラさんの紹介で設立当初からこのセンターと交流し、支援を行っています。このセンターができるまでは地域の障がい者の多くは、家庭から外に出る機会がなく、家族が介護することがほとんどでした。今ではクラスノポリエ地区の26人の障がい者がこのセンターに登録されています。そのうち4人は「重度」のため在宅介護を受けています。センターは、土日を除く週5日間、朝8時から夕方5時まで開所していて、利用者によって回数は異なりますが、送迎バスで通っています。利用者は18歳（？）以上の大人で（子ども達には別の「障がい児リハビリセンター」がある）、年齢の上限はありません。センターでは、工芸、手芸、音楽、野外スポーツやピクニック等々、スタッフの方々が様々に工夫して、利用者の創造性を活かすような取り組みをしています。皆さん、毎日、とても楽しみにして通っているとこと。通所者のほとんどが「1、2級の障がい者」で、「就労ができない」グループなので、障がい者年金を受給していて、センターへの通所も無料です。センターでは基本的に就労支援は行っていないですが、障害の程度に応じて場合によっては短期の就労の推薦をしたりすることもあるそうです。スタッフの方々は、学校や幼稚園の先生だった人が、研修を受けて担当しています。「私たちも、この仕事を通じて、障がい者の方々から学ぶこと、得られることも多いのです」と、やさしそうな所長さんが言われていました。

訪問した私たちのために、ギターを弾いてくれたり、カラオケで歌を披露してくれたり、踊りを見せてくれたりと、歓迎してくれました。障がいを持っていても、それぞれに個性的で豊かな創造力を持っていることが伝わってきました。

今年は、私たちの支援カンパでピクニックの時に使う折りたたみテントと、外でのスポーツをするためのバドミントンのセットを購入したいとのことでした。私たちの滞在中に商品が届かなかったので、後で写真をメールで送ってくれました。



病院長のガーリャさんのお話

クラスノポリエ中央病院では、院長のガリーナさんと、衛生局長のサーシャさんが迎えてくれました。（サーシャさんの話しは前号で報告しましたので、そちらをご覧ください。）

ガリーナ院長に、住民の健診体制や結果についてお聞きしました。「子ども達は年に2回の保養に出かける前に、必ず健診を受けることになっている。成人は、職場健診を受ける。ベラルーシでは、全く働いていない人は少ないので、これでほとんどの住民の健診ができる。血液検査、心電図、胸部レントゲン検査など行う。もちろん、仕事に就いていない人は、自分で病院に来ないと受けられないが、来院すれば無料で健診を受けられる。」（ベラルーシでは、社会主義ソ連の時代から続く

医療制度のため、汚染地に限らず基本的に「医療」は無料。これは、日本などとは大きな違いです。)

「地域全体では、健康レベルの4区分（子どもと同じく、＜第一グループ＞全く健康上問題なし、＜第二グループ＞急性疾患に罹患、＜第三グループ＞慢性疾患あり、＜第四グループ＞障がい者）のそれぞれに属する人々の割合は、ここ数年、ほとんど変化がない。」とのこと。疾病の詳細なデータを頂けないかと、お願いしてみましたが、「政府に許可をもらわないと、渡せない」と、頂くことはできませんでした。実際のところ、どこまで政府の監視が厳しいものかわかりませんが、臨床医（耳鼻科）のガーリャさんにとっては、あまり地域の疾病データを解析したり、まとめたりといったことには、関心も、またそんな余裕もないのかな…という印象もありました。

ガン、循環器疾患、甲状腺疾患など、いくつかの疾患については「チェルノブイリ事故による被ばくと関係あり」ということで、チェルノブイリ事故被災者に関する「法律の18条」（法律の条文については、別途、入手して調べる予定。）で定められているとのこと。皮膚、肺、甲状腺、膀胱のガンなど、またガン以外の甲状腺疾患などが支援の対象疾患となっている。支援対象か否かの判断は特別の「委員会」で決められるそうです。1993年以降、クラスノポリエ地区では、小児甲状腺ガンは診断されていないとのこと。（事故当時の子ども達が成人して大人になったからでしょうか。）また、事故後、甲状腺の自己免疫疾患も増えたそうです。

今、フクシマの汚染地では、事故後のクラスノポリエと同じように低線量の被ばくの中で子ども達が暮らさざるをえない状況があります。ベラルーシの施策にもいろいろと問題はありますが、限られた予算の中で、子ども達の「保養」や、人々を放射能から護る施策、健康を守るための健診などが今も続けられています。日本政府にはフクシマ事故被害者の健康を守る施策をしっかりと行うように、引き続き求めていかねば…と思います。



「子どもの障がい者リハビリセンター」訪問



「子どもの障がい者リハビリセンター」では、子ども達が歌や寸劇を披露してくれました。そして、今年の私たちの支援で購入した、トランポリンとランニング・マシーンのお披露目がされました。子ども達のリハビリのために使いたいと、センター長とスタッフの皆さんが選んだものです。センターにある様々なリハビリ用の道具は、ほとんどが先生達の手作りです。限

られた予算の中で子ども達のために一生懸命に努力をされているスタッフの方々の思いには、いつも脱帽です。

センターでは若い看護師さんが常駐していて、毎週、子ども達を診察するそうです。そして何か身体の異変があれば、早めに対処できるようにしているとのこと。汚染地域だから特別に、というわけではありませんが、きめ細やかな健康管理を行っている様子が伺えました。病気になって、症状が出てどうしようもなくなってから病院に行って、診断を受け、治療を受けるという日本の医療や健康管理体制とは、根本的に違う姿勢を感じます。



看護師さんが常駐している

チェルノブイリの悲劇を「歴史」として学ぶ子供たち

今回は、ベーラさんの娘さんのオーリャさんが理科の教師として働いている学校を訪問しました。学校では私たちの訪問を受け入れるために、11年生（高校3年生に相当）が中心になって、歓迎の催しを開いてくれました。講堂に生徒たち、全校生徒548人のうち、下級生も含めて150人くらいと先生たちが集まってくれました。11年生の「歴史サークル」の生徒たちがパワーポイントの映像、朗読、歌などをまじえて、チェルノブイリ原発事故が、ベ



ルノブイリ事故を、自分たちの故郷が体験した「歴史上の悲劇」として子供たちが学んでいることが伝わってきます。発表の最後には、同じく原発重大事故が日本のフクシマで起きてしまったことも紹介されていました。ただ、全体を通じて、原発や核エネルギー利用そのものの是非についての言及は、全くありませんでした。（政府の政策に批判などできない今のベラルーシの国情では、仕方のないことです…。）

フクシマを伝える～繰り返してはならないはずだったのに…

生徒たちの発表の後に、「フクシマのことを子供たちや先生たちに少し話しをしてほしい」とあらかじめベーラさんから依頼されていたので、松川さんと一緒に舞台上がりました。「チェルノブイリの被災地の皆さんを支援し、その悩みや悲しみを共有しながら、この悲劇を繰り返してはならないと訴えてきたにもかかわらず、私達は日本のフクシマで、同じような重大事故、広大な汚染

と多くの人々の被ばくを起こしてしまった…」と、話し始めると、いろんな思いがこみ上げてきて、私はまた涙で声をつまらせてしまいました。私達はこれまで、「日本の原発を止めて、チェルノブイリを繰り返さないことが、チェルノブイリのヒバクシャとの連帯の証しだ」と思いながら、日本でも活動してきたのです。チェルノブイリ事故の被害で長年にわたって苦しんできたクラスノポーリエの人々を目の前にして、連帯し、支援してきた私達が、その同じ苦しみを自分たちの国でまた「繰り返してしまった」という事実を語らねばならないことが、悲しくて、情けなくて、申し訳なくて…。なんとか気を取り直し、フクシマ事故による汚染地図や現地の写真をいくつか見せながら話しをしました。



講堂に集まった子ども達

その次に、松川さんがロシア語で紙芝居「命の次に大切なもの」（スライドで上映）を上演してくれました。この紙芝居は、福島の新地町の旅館の女将さんが原作者で、津波から命がけで漁船を守ったのに、家族を亡くしてしまい、原発事故で漁もできない…そんな漁師さんの実話に基づくお話です。迫力のある絵と語りで、講堂の集まった人々は引き込まれ、涙を浮かべている人もいました。（この「紙芝居」を、原作者の村上さんが、12月14日の集いで語って下さいます。案内16ページをご参照下さい。）

学校の先生のお話

学校の行事や案内がひととおり終わって、校長室でお茶を頂きながら校長のタチアーナ先生、副校長のエレーナ先生のお話を伺いました。事故当時、お二人はすでにクラスノポーリエの学校で働いていたそうです。「この地区が汚染されたということは、5月のメーデーが終わる頃まで全く知らされなかった。4月末に降った雨が赤かったのを記憶している。5月9日頃になって、子供たちを外に出さないよう、教室の窓は閉めるよう、床は雑巾がけをするように、森には行ってはいけない、などの指示が当局から出された。学校には放射線を測定する器械があったので測定してみた



ノボキャンブに言った子ども達と面談

が、その数字の意味が自分たちにはよく解らなかった。子供たちを夏キャンプに送り出したが、9月1日の新学期には、皆戻ってきた。その後は屋外での体育はしなかった（いつ頃までそうしていたか、聞きそびれました）。11月になってやっと、放射能の専門家が地区にやってきた。自分たちも校庭の放射線測定を頻繁に行い、線量の高い所は表土をはぎ取ったりする作業を

した。コルホーズに農作業の手伝いに行ったときは、靴を履き替えるようにするなど、汚染した土を建物の中に持ち込まないように気をつけた。」など、28年前の事故のあった年の学校での様子を話してくれました。

学校では、子供たちが家庭科実習で使うミシンがほしいとのことでしたので、支援カンパでミシンを購入して贈りました。学校中のカーテンは、上級生たちが自分たちで布をミシンがけして作ったのを掛けているのだそうです。大きな窓にかかっている、素敵なドレープのカーテンを見て、「すごい！」と感激しました。



クラスノポリーエのお店で副校長先生と一緒に、支援カンパでミシンを購入



学校の「郷土の歴史博物館」には、23年前の「救援関西」の訪問団の写真も展示されている。展示室の案内係してくれた「歴史サークル」の子供たちは「展示物の写真に映っている人物＝私」を目の前にして、ちょっと、とまどったような表情だった。なんせ、この子たちが生まれる前から私達はクラスノポリーエに毎年来ているのですから…。

「フクシマのニュースが最近伝わってこない…」

ベアラさんは「フクシマの皆さんは、どうされていますか。」と気にかけておられました。最近、フクシマの被災地のニュースがほとんど伝わってこないのだそうです。「むしろ人々は政情不安定なウクライナの問題など、直接に自分たちに関係あることに興味があるので、フクシマのことはあまり気にしなくなった」「フクシマでは30km圏内にも、人々が帰還できるようになったと聞いた。すいぶんと落ち着いてきているのだな…と、思っていた。」とのこと。（チェルノブイリでは30km圏内は、未だに「居住禁止・立ち入り禁止区域」です。）

フクシマでは、まだ事故は収束せず、被災地では問題が山積みになっていること、放射線レベルが十分に低くなっていないにもかかわらず政府は一方的に「旧避難区域」への帰還を促していることなど、私の知る限り、フクシマの実情をお伝えしました。

ベラルーシだけでなく、他の国々でも（あるいは日本国内でもある意味そうかもしれませんが）、フクシマの最近の実情をちゃんと伝えるメディアもなく、政府の公式発表しか伝わっていないようです。チェルノブイリとフクシマの被害者どうしの直接の交流も重要なのではないかと思います。今後、そのような企画も「救援関西」の皆さんと相談しながら進められればと思います。

チェリコフの「子供社会保護センター」と幼稚園

ベラルーシ滞在3日目（4月11日）、クラスノポーリからすぐ北にある汚染地区チェリコフに移動。子供社会保護センター「プラレスカ」所長のスベトラーナさんと一緒に、2011年に亡くなったバーリャさんのお墓参りに行きました。「バーリャは、いつも私の相談に乗ってくれた親友でした。今でも何か悩んだりした時には、ここに来るのです。そうすると心が安らぎます。」とスベトラーナさんは言われていました。私達も菊の花をお供えしてお参りしてきました。ほんとにバーリャさんが亡くなってしまったなんて、今でも信じられない気持ちで、いろんなことが思い出されます。バーリャさんの高齢のお母さんの体調がよくないとのことで、今回はバーリャさんのご家族にはお会いできませんでしたが、私達の訪問を聞いて、妹のターニャさんが電話をしてくれました。

いつも私達の支援・交流の受け入れを担当して下さっていたバーリャさんの活動を引き継いで、今回からスベトラーナさんがチェリコフでの受け入れを担当して下さることになりました。チェリコフでは、最近、区長が替わり、新しい区長は外国からの市民団体の受け入れに対しても前向きな人だそうで、スベトラーナさんたちもホッとしているとのこと。「プラレスカ」を



訪問し、職員の方々と交流しました。交流会にはチェリコフ地区の教育長をしているスベトラーナさんの妹さんも参加され、「次回はぜひ区長にも会って下さい」と誘って下さいました。バーリャさんが築いて下さった私達とチェリコフの人々との交友関係を、これからも続けていけそうなのでほんとうによかったと思います。「プラレスカ」では、

親のアルコール依存症、病気、家庭内暴力、育児放棄、等々、様々な理由で子供たちの養育が難しくなっている家庭の支援をしています。以前は、子供たちを緊急避難的に保護する寄宿施設があったのですが、数年前から政府の方針が変わり、どうしても元の家庭で生活のできない環境にある子供たちについては「里親」が引き取るシステムになり、寄



購入して贈った掃除機

宿施設は廃止されました。子供たちは、放課後や休みの時に「プラレスカ」に来て、様々なサークルに参加したり、スタッフに悩み相談をしたりしています。プラレスカでは、今回、掃除機と印刷用の紙が必要とのことでしたので、支援カンパで購入して贈りました。

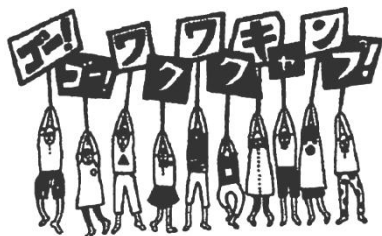
今回はチェリコフでは宿泊せずに夕刻にはミンスクまで移動しなければならず（車で4～5時間）、慌ただしい訪問でした。もうひとつの支援先のコロソク幼稚園では、園長先生と一緒に昼食をご馳走になり、支援カンパをお渡しするのがやっとで、ゆっくりとお話をする時間も早くに出発しなければなりませんでした。ちょうど「お昼寝」の時間だったので子供たちにも会えないま

ま、心残りでしたがチェリコフを後にしました。

＜今回届けた支援（訂正）＞

資金援助	マリノフカ（「移住者の会」）	1000	ドル
救援物資購入	マリノフカ（「移住者の会」）	300	
	クラスノポーリエ：		
	ソヌチカ幼稚園	100	
	子どもの障害者センター	300	
	成人の障害者センター	200	
	学校	300	
	困窮家庭の衣類購入	200	
	チェリコフ：		
	ブラレスカ児童保護施設	300	
	コロソク幼稚園	300	
		2000	ドル
「子ども元気」	マリノフカ	1000	ドル

- * 1ドル＝105.4円
- * 上記の他に、昨年の「ノボ・キャンプ」参加の交通費：2,400,000ベラルーシ・ルーブル（約24000円）を支払った。
- * クラスノポーリエとチェリコフについては、一昨年から「子ども元気」資金の代わりに「ノボ・キャンプ」への参加支援を増やす方向で支援している。
- * 前号で、チェリコフのコロソク幼稚園への支援（物資購入）300ドルが漏れていました。また、クラスノポーリエの各支援先への振り分け額の詳細が記載されていませんでした。お詫びして訂正します。



ゴーワク 2014 夏の家

長かったような短かったような、無事に終わってほっとしたような・・・

今年は7月26日～8月29日の期間中に総勢こども34名、保護者17名が福島・宮城・茨城・千葉の4県から参加されました。ひとりひとり、さまざまな事情を抱えながら、この夏の家集い、短い時間ではありますが大家族となって生活をともにしました。今年も、多くの方が出来るだけ参加しやすいように、年齢や地域を限定せず、また参加期間もいつ来てもいいという形にしました。2歳の乳幼児から中学3年





生まで、多い日には手伝ってくれる人、参加者を合わせて 50 人もの人達が、「南丹交流の家」で寝食を共にしました。

ただ、今夏はなかなか天候に恵まれず、予定していたイベントが延期になったり中止になったり、外で遊べないことも多い夏でした。それでも期間中何度も川へ行行ってサワガニをとったり、毎朝散歩に出かけたり、水遊びをしたり、と日々過ごしていました。また、成長期にさしかかった子が多かったのか、よく食べる食べる、お米が足りなくなるんじゃないか...?とハラハラするほどでした。なによりも、こどもたちの大きな病気やケガもなく、楽しくにぎやかな日々を送ることができました。

8 月 29 日に最後のこどもたちを見送り、今年の夏の家も終わりを迎え、長かったような短かったような、無事に終わってほっとしたような、心のどこかがスーカスーカするような、毎年複雑な心持ちでこの時を過ごしています。参加した子どもたちとその家族とのつ

ながり、そしてみなさまとのつながりを大切にしながら、また来年キャンプで会えるように、頑張っていきたいと思います。

今年も報告書を発行し、こどもたちの様子や、成果・課題など、みなさまと共有していきたいと考えています。震災、原発事故から 3 年以上経ち関心の薄れていく人も多いなか、みなさまの温かい思いに支えられて、今年もキャンプを実現できたことを、本当に感謝いたします。

最後になりましたが、毎年引き続き手伝ってくれる人の医療講習会や参加者のメディカルチェックや紙芝居の読み聞かせなど「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」のみなさまには多くの支援をいただきました。今後とも、みなさまのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

ゴー!ゴー!ワクワクキャンプスタッフ一同

事前学習会・健康管理を担当して

6 月 15 日日曜日ゴー!ゴー!ワクワクキャンプ 2014 年夏の家を手伝ってくれる人への事前学習会がありました。

保養の意義とゴーワクのスタンスの説明後、チェル関は、こどもたちの健康管理について、講習とデモストを担当しました。

なんと、新聞で宣伝されたためか、ゴーワクの社会的認知が広がったためか、30 名の大量参加。全くの新顔も、新規の大学も多数。

伊達さん石橋さん尾崎さんの報告も立派でした。

昨年デモストにリアリティがなかったと反省し、今年は、熊のぬいぐるみをこどもに見立てました。意識がない子を発見したら。呼びかけ、人を大声でよぶ練習をしました。呼吸停止を見て聞いて感じ、気道確保と人工呼吸、胸骨圧迫のデモストをし、何人かは体験もしてもらいました。

こどもたちの心のケアについては、日常生活を整え安心してもらえる関わりが、ケアに繋がると、事例で確認しました。

ボランティアを通じ、多くの若い人々に福島を知って貰えと感じた一日でした。

長沢由美



熱心に蘇生法の練習



集会報告

「連帯・交流の集い：日本企業による先住民の聖山での ウラン採掘計画にストップを！」

去る 8 月 3 日、西宮市民大学交流センターで、「連帯・交流の集い：日本企業による先住民の聖山でのウラン採掘計画にストップを！」を持ちました（「ヒバク反対キャンペーン」「救援関西」共催）。アメリカからウラン採掘に反対するアコマ・プエブロ先住民活動家のローラ・ウォッチェンピーノさんが、原水禁のゲストとして招聘される予定で、広島・長崎に行く前に関西でも話しをしてもらはずだったのですが、ローラさんのお父様の健康悪化のために来日が直前に中止となりってしまいました。そこで、通訳を依頼していた玉山ともよさんに無理をお願いして、急遽、「ピンチヒッター」を務めて頂きました。玉山さんは、米国南西部での長期滞在も含めて、現地を度々訪問され、先住民との交流も深めながら、ウラン採掘の地域社会への影響等について研究してこられた方です。当日の報告の要点を玉山さんに書いて頂きました。

米国南西部ウラン開発の現状について

玉山ともよ

ニューメキシコ州のアルバカーキ市より北西にかけての一带は、「グランツ・ミネラルベルト」と呼ばれ天然ウランが豊富なところである。これまで東西冷戦期の核兵器製造のため、ならびに原発が 79 年のスリーマイルアイランド事故にいたるまでは米国内で 104 基の原発が建設され、その燃料として、米国内でもウラン開発が盛んに行われた。とりわけラグナ・プエブロ保留地にあった 1953 年から 82 年まで操業していたジャックパイル・ウラン鉱山は、主に露天掘りで当時世界最大といわれる産出量を誇っていた。私は 20 年ほど前にそのウラン鉱山で働き、被曝しガンになり亡くなったドロシー・パーリーさんという方に出会ったことからウランによる被曝等に関心をもち、2004 年からは大学院でその問題を研究するに至った。

米国南西部でウラン鉱山開発は盛んに行われたが、80 年代終わり頃からカナダやオーストラリアといった他国の安いウランに押され、米国内のウラン開発会社は急激なウラン価格の低下のために十分な環境修復措置もしないままに操業を停止した。そして今もたくさんの放置・遺棄された鉱山跡や精錬所跡が残っている。試掘跡も含めるとその数は西部 14 州にわたり 10400 カ所に上ると言われている。つまり今もって除染がなされていない場所が多数あり、地元住民のなかでも特に先住民は大きな被害を被っている。

例えばナバホ・ネーション東部のチャーチロックというところでは、1979 年 7 月 16 日に精錬所の鉱滓池ダムが決壊し大規模な放射能漏れ事故が起こった。流量でいうとチェルノブイリに次ぐ規模で 1100 トンの放射性物質がプエルコ川に流れ込み広範囲に汚染した。しかし同年 3 月に起きたスリーマイル原発事故ばかりが注目されることとなり、人口が圧倒的に少なくかつマイノリティー

住民が点在して住むチャーチロック事故のことは、ほとんど報道もされず、除染もされずに、長きにわたって無視され忘れさせられようとしていた。

しかし 2007 年をピークに原子力ネッサンスと呼ばれた新たな原発推進策の中で、ウランがそれまでの値段の約 20 倍に跳ね上がる 1 パ운드あたり 137 ドル近くにまで高騰する状況が生まれ、再びウランを採掘し低迷する経済を活性化させたいという思いを持つ地元民が増え、再開発計画がチャーチロックをはじめかつて採掘された場所で多数持ち上がった。ウラニウム・リソース社はかつてチャーチロック事故を起こしたユナイテッド・ニュークリアー社の権益を購入し、同じ場所でも今度は大量に地下水をくみ上げ、化学薬品を混ぜて再注入し、ウランを化学的に溶かした溶液を再度くみ上げ回収するという原位置抽出法（ISL 工法）を提案した。ナバホ・ネーションは 2005 年に保留地内の一切のウラン操業を認めない先住民法を制定したのにもかかわらず、チャーチロック付近は通称チェッカーボード（碁盤）と呼ばれる複雑に土地の所有権が入り乱れる場所で、開発会社が隙間を縫うように開発攻勢をかけている。現在でもその付近はナバホ住民が主に住み、再開発によりトータルで約 1 万 5 千人の飲料水源が汚染されるかも知れないという危険性に直面している。乾燥地のウラン開発で一番問題なのは水の大量浪費と汚染である。

日本にとってはもっと関係が深いのが、同じグランツ・ミネラルベルト区域内でテラー山という近隣先住民より聖なる山として崇められている山の裾野に、ロカホンダという名の鉱山再開発計画が進められていることである。このロカホンダ鉱山には住友商事が 4 割出資している。そして 2007 年と 08 年には経産省管轄の独立行政法人である石油天然ガス鉱物資源機構から、海外ウラン探鉱支援助成金を住友商事は受け取っており、いわゆる我々の税金までもがまともな情報公開もされないままこの案件に投資されてしまっている。

その後、3.11 の東電福島第一原発事故の影響により日本国内で原発稼働運転がしばらくゼロだったためにウランの需要がなくなり価格が一気に低迷したが、それでもこの助成金はなくなり 10 年の長期にわたり今現在も事業は続けられている。現地では MASE（安全な環境を求める多文化連合）という市民グループのネットワークが 2008 年頃から立ち上がり、ウラン再開発問題や過去の



先住民の聖地マウント・ティラーで、日本企業進出の出資による新たなウラン開発が進められようとしている。

除染放置問題、被曝者補償法の修正にむけて取り組んでいる。電気の恩恵を享受する側と資源採掘のフロントエンドの側の市民同士が同じ当事者としてつながることが有益である。日本政府によるウラン開発企業への補助金を廃止し、聖地の開発への投資を住友商事に止めさせるための連帯、運動が今こそ求められている。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足23周年の集い

チェルノブイリ、フクシマを繰り返さないで！
大震災・津波 そして原発重大事故
“フクシマの想い・命の尊さを伝えたい”

日時：2014年12月14日（日）、1時半～4時半

場所：西宮市民会館（阪神・西宮駅下車、北側すぐ）

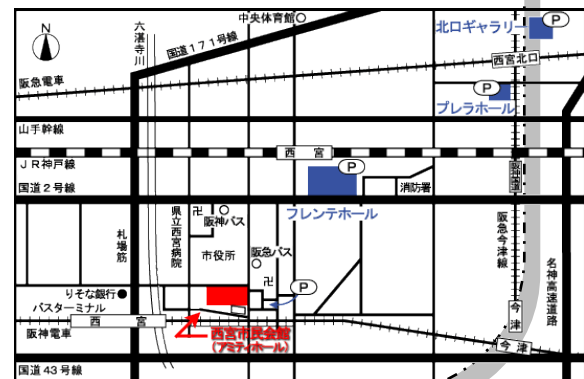
- * 基調報告・救援関西の取り組み
- * 福島からのゲストのお話と紙芝居

今田かおるさん（猪苗代町・医師）：

福島の緩和ケア医が語る東京電力福島原発事故の現状

村上美保子さん（相馬市新地町・「朝日館」女将）：

紙芝居とお話「命の次に大切なもの」



***ウラン兵器禁止国際行動デー・連帯集会 in 関西**

日時：11月9日（日） 14時～16時半

場所：西宮市大学交流センター（阪急神戸線・西宮北口）

報告：5回目の「ウラン兵器国連決議」採択に向けて～国連総会での活動の報告

振津かつみ（ICBUW 国連委員）

主催：「ウラン兵器禁止を求める国際連合（ICBUW）ジャパン・関西」

「国の責任による、福島県の19歳以上の甲状腺に関わる医療費無料化要請書」への賛同を！

リーフレットを同封いたします。第3次集約までの累計は個人1万786筆、団体71です。第4次集約は10月末です（その後も続けます）。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

賛同のご連絡は＜cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp＞までお願いいたします。

なお対政府交渉の詳細は下記にあります。

<http://www.jttk.zaq.ne.jp/hibaku-hantai/>



ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

連絡先：〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

0722-53-4644

郵便振替：00910-2-32752

口座名：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西